

銅版を織るひと—浜口陽三展

千葉市美術館所蔵作品展

房総ゆかりの作家・作品 Vol. 1

◆ 浜口陽三というひと

浜口陽三は1909年、和歌山県に生まれました。実家は千葉県銚子に代々続く醤油醸造元で、浜口自身も6歳の時同地に移り住んでいます。その後上京して東京美術学校彫刻科に入学しますが、父の知人であった梅原龍三郎に勧められて中退、パリに渡ります。21歳の時でした。パリでははじめ油彩を、ついで水彩や銅版を独修したといいますが、1939年大戦勃発のため帰国を余儀なくされます。戦中は通訳としてベトナムに赴き、またその地で病を得るなどし、本格的に銅版画に着手するのは1940年代も末のこと、すでに40歳を迎えようとしていました。

長い模索期を取り戻そうとするかのように、1950年代からは旺盛な作画活動を展開します。そしてメゾチントという銅版技法を自分のものとし、その独特な質感を持つ神秘的な画面が大いに注目されたのです。1957年以降数々の国際版画展で受賞、銅版画の巨匠として揺るぎない名声を獲得したことはあらためていうまでもないでしょう。1953年からパリを、1981年からはサンフランシスコを拠点に活動を続けて今日に至ります。美食家で車好き、自分を取り巻くあらゆるものに美を探る作家として知られます。

浜口陽三の芸術を読み解く鍵を、彼が彫刻科に在籍していた事実を求めることは多くの論者により試みられています。確かに、手がける作家がごくわずかであった当時であっても、彫刻経験のある浜口には比較的近い素材として銅版が在ったのかもしれませんが。また絵筆によらず、線描にもよらず、版面の微細な操作が作画に結びつくというメゾチントの技法、そして平面でありながら豊かな立体感を醸し出す浜口の造形には、彫刻との共通項が確かに存在するといえます。

◆ メゾチントについて

油絵具や岩絵具、アクリル、パステルといった画材がそれぞれ固有の質感を持つように、メゾチントというメディアの特質をぬきにして浜口陽三の造形を語ることはできません。今日浜口作品として知られる銅版画のほとんどにこの技法が用いられているからです。そもそもメゾチントとは、17世紀のオランダに生まれた金属凹版の一種です。金属凹版では版面につけられたキズにインクがたまり、それが紙に転写されて図柄となりますが、メゾチントの場合は版面にびっしりとキズをつけることから始まります。この版(そのまま印刷すると真黒になる)のキズを途方もない時間をかけてひとつひとつ潰し、あるいは削り取って(その部分は白く印刷される)図柄を描いてゆくわけですが。黒からグレイ、白へと至る美しく精妙なグラデーションが得られ、“点”による写真的な描写を可能にしたことから、メゾチントは肖像画の複製などに大いに活躍しました。しかしながら19世紀の写真術誕生とともに色褪せ、過去の技法として忘れられてゆきます。この技法を自らの芸術的欲求を満たす手段として選び、現代に甦らせた一群の作家のひとりが浜口陽三ということになります。

けれども浜口は、単なる復興では満足しませんでした。彼はふたつの試みにより、メゾチントに新たな表情を与えたのです。そのひとつは版の準備においてなされました。通常メゾチントでは版面を埋めつくす微細なキズがピロードのような深い黒を生むのですが、彼はやや目の粗い、網目状のキズをほどこして紙の地をうっすらと残し、光をはらんだ透明感のある地を獲得したのです。ふたつめは複数の版を用いるカラー・メゾチントの考案です。浜口と聞けば誰もが思い出すあの複雑で豊饒な色合いは、版工程を幾度も繰り返すという気の遠くなるような作業から生まれたのです。

微粒子の集積を見るような、あるいは毛織物の肌ざわりを持つ浜口の造形は、技法上の特性と分かちがたく結びついています。同じ技法を選んだ作家が皆ひとつの作風に辿り着くわけではありませんが、メゾチントとの出会いは、浜口という作家のスタイルをある程度決定づけたといつてよいでしょう。技法上の制約が創意を促し、新たな造形を生む—作家と技法とが互いにかげがえのないパートナーとして、存在しているといえるのではないのでしょうか。

◆ メゾチント作品の展開

浜口陽三のメゾチント着手は1950年代はじめに遡りますが、以来近年に至る40年あまりの時間のなかで、その技法や作風、モチーフは少しずつ変化を見えています。最初期において浜口は、たて・よこ・ななめに走る線條のなかに図柄を捉えたモノクロームの小品を数多く制作しています。線條は後年の作品に比して粗密にばらつきが見られ、全体として薄墨のかかったような、やや平板な印象を与えます。画題としては隅田川べりの風景と、切れ長の目に憂いを含むほっそりした女性像のふたつがこの時期を代表します(図1・2)。その後線條は密度を増し、深々とした黒が現れ、紙の地色との美しいコントラストを形成するようになります。50年代中頃には題材として静物が登場、とりわけ果実は浜口のメイン・モチーフとなりました(図3)。

カラー・メゾチントの初作は1955年の〈西瓜〉(図4)です。色彩は未だ浅く画面の厚みも乏しいものの、光源がいくとも知れない、素材自身が発光体であるかのような表現がすでに見られます。1956年の〈パリの屋根〉(図5)がこの頃の代表作といえるでしょう。50年代後半になると構成要素が減り画面が整理されてゆくとともに、食卓や地平線など、空間の奥行きを暗示するモチーフが描かれなくなります。そしてついには黒い地のなかに素材がぼつんと浮かぶ〈白菜〉(図6)のような作品も生まれ、浜口の代表的なスタイルのひとつとなりました。

浜口陽三の版業がひとつの高みに達し、〈19と1つのさくらんぼ〉(図7)や〈二色のぶどう〉(図8)などの傑作が次々に生まれるのは1960年代中期のことです。この時期黒の深まりとともに色彩は熟し、熱を帯び、鮮やかさを増してきます。また版の処理は精巧を極め、画面は極細の繊維からなる織物のような、ふっくらと厚みのある質感を獲得するのです。

こうした造形を軸に版型や題材、構図、配色を自在に変えながら、70年代、80年代と浜口のメゾチントは展開してゆきました。近年では小品制作が多くなったものの、色彩はますます燃えるような輝きを加えています。そして小画面にふわりと浮かぶ浜口お気に入りのモチーフたち—さくらんぼやてんとう虫、蝶々や毛糸玉が、いよいよその存在の神秘を高めているように感じられます。

◆ 浜口陽三の造形言語—

モチーフ、色彩、
テクスチャーについて

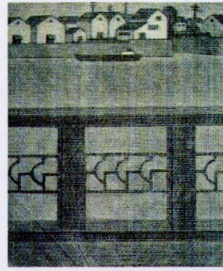
モチーフについて—浜口の版業を見渡してみるとある事実—彼の好むモチーフがみな円や球を単位とする、あるいはそれに近い形状であることに気がきます。そして円や球という元来簡潔で基本的な形を、浜口は決してデフォルメすることなく、けれどもさらに歪みのない、滑らかな形に還元して呈示しています。結果それらは日常性も個別性も奪われて記号と化し、紛れもなく果実や昆虫であるにもかかわらず、何か特別な、厳かな存在となって画面に現れるのです。神秘的な光を帯びながら深い黒のなかに沈むさくらんぼやぶどうたち。浜口の作品のなかでしか出会えない、さながら「浜口国」の住人のようです。

色彩について—浜口のカラー・メゾチントはふつう、黒・青・赤・黄の四つの版より成り立っています。銅版のキズひとつひとつに留まった粒子状の顔料が紙の上で重なって紫となり、橙となり、緑となるのです。かすかに残された紙の地色は光として、この事業に参加しています。だから画面に目を寄せると様々な色の粒が立体的に迫り、まるで満天の星空を見るような眩暈を覚えるのです。一見ただの黒や赤に見える色面に、無限の表情が隠れている驚き—色の成り立ちそのものが、強い表現力として存在しているといえましょう。

テクスチャーについて—浜口のメゾチントが持つ手ざわりのよいネルのような質感は、見るものの目にとっても感覚的な悦びを与えるとともに、堅い金属の板からこんなにも優しく柔らかなものが生まれる不思議を感じさせずにはおきません。銅版につけられた無数のキズが、繊維となって紙を包み込み、やがて布となる不思議—。作品が一枚の布だとすれば、さながら浜口は機を織るひとりの職人でしょう。長い時の堆積のなかで黙々と銅版を織るひと—浜口陽三とは、そんな芸術家ではないでしょうか。

銅版を織るひと—浜口陽三展・出品リスト

1	猫	1950年頃	6.5×9.5cm
2	隅田川 (大川中洲付近)	1951年頃	10.5×9.0cm
3	顔	1952年	24.0×18.0cm
4	顔	1954年	11.5×8.5cm
5	ジブシー	1954年	29.0×28.5cm
6	西瓜二切	1954年	29.0×39.0cm
7	魚と果物	1954年	29.0×39.0cm
8	西瓜	1955年	8.6×13.5cm
9	うさぎ	1955年	29.0×29.0cm
10	筆とメロン	1955年	29.5×29.5cm
11	パリの屋根	1956年	18.0×18.0cm
12	パリの屋根	1956年	15.0×20.0cm
13	洋梨とぶどう	1956年	23.5×54.5cm
14	水差しとぶどうとレモン	1957年	29.5×34.5cm
15	ざくろ	1957年	29.5×34.0cm
16	雲	1958年	26.5×49.0cm
17	くるみ	1959年	54.0×23.0cm
18	かに	1960年	8.0×10.0cm
19	黒いさくらんぼ	1960年	20.0×27.0cm
20	貝	1960年	30.0×45.0cm
21	白菜	1960年	29.5×44.0cm
22	やどかり	1961年	10.0×8.0cm
23	くるみ	1961年	15.0×11.5cm
24	ひとで	1962年	10.0×8.0cm
25	1つのさくらんぼ	1962年	35.0×30.0cm
26	黒いさくらんぼ	1963年	35.0×30.0cm
27	アスパラガス	1964年	41.0×29.5cm
28	19と1つのさくらんぼ	1965年	23.3×53.5cm
29	蝶	1968年	12.0×12.0cm
30	17のさくらんぼ	1968年	25.0×52.0cm
31	二色のぶどう	1968年	6.0×15.0cm
32	蝶と太陽	1969年	20.0×20.0cm
33	ぶどうの房	1969年	52.0×25.0cm
34	蝶と葉	1972年	9.0×10.0cm
35	あじさい	1974年	6.0×6.0cm
36	ツーペアーズ	1976年	4.0×6.0cm
37	貝	1976年	12.0×12.0cm
38	2匹のてんとう虫	1979年	8.0×6.0cm
39	二色のぶどう	1979年	8.5×15.5cm
40	3つのポプラ	1980年	62.5×47.5cm
41	緑の毛糸	1981年	8.0×12.0cm
42	西瓜	1981年	24.0×55.0cm
43	赤い蝶	1981年	6.0×4.0cm
44	ロビーナのさくらんぼ	1981年	8.0×6.0cm
45	ロビーナのさくらんぼ (15枚組)	1981年	59.0×102.0cm
46	くるみ	1982年	9.0×9.0cm
47	青い蝶	1982年	5.0×5.0cm
48	青い蝶 (15枚組)	1982年	63.0×98.0cm
49	びんとレモン	1983年	62.5×47.5cm
50	てんとう虫	1984年	6.0×4.0cm
51	てんとう虫 (15枚組)	1984年	59.5×101.0cm
52	野	1985年	24.0×55.0cm
53	編み棒	1985年	24.0×55.0cm
54	三匹の蝶	1986年	12.0×12.0cm
55	三匹の蝶 (15枚組)	1986年	72.0×114.5cm



左から
図1 隅田川
(大川中洲付近)
1951年頃
図2 顔 1952年



左上：図3 魚と果物 1954年
左：図4 西瓜 1955年
上：図5 パリの屋根 1956年



図6 白菜 1960年



図7 19と1つのさくらんぼ 1965年



図8 二色のぶどう 1968年

千葉市美術館所蔵作品展 房総ゆかりの作家・作品Vol. 1
銅版を織るひと—浜口陽三展
1996年3月1日発行 編集・発行 千葉市美術館
表紙作品：〈水差しとぶどうとレモン〉(1957年)